

---

# 草原の流星

藍村 泰

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

草原の流星

### 【ZPDF】

Z7098K

### 【作者名】

藍村 泰

### 【あらすじ】

『帰つたら一番に母さんへ言つんだ』

喉はカラカラに渴いていた。言葉が出ない。少年の顔と声が脳裏で回る。

『ただいまつて』

澄んだ風の匂いがした。

わたしはようやく拓けた視界に、安堵の溜め息を吐く。涙の跡は生々しく頬に残っているものの、折れた心は少しづつだが回復しつつあった。

右手に握りしめていた口ケットペンドントを首からかける。仄かに温もりを感じる。

何日もかけてここまで来た。知らない道をひたすら歩いた。ただ、少年の思い出だけを追つてここまで来た。

『深い森は死者の国にも繋がっているから、注意して進まなければいけない。森は深く、人を惑わす』

そのとおりだった。何度、常時霧が立ち込める森の中、迷いそうになったことだろう。

『そして、やつとの思いで森から抜け出したら、一面草原が広がっている。幼い子らは草原で駆けずり回つていて、笑い声が絶えない』眼前にある風景は、少年が口にした風景そのものだ。果てない草原で、馬に跨がった子供達が太陽の下、笑っている。

『草原を歩いていくと、テントがたくさん張つてある区域がある。草原の民の集落だ。薄汚れたテントの合間では他愛のない話が繰り広げられていて、武具屋の親爺さんが大きな声で客引きしている』ちょうど昼時に集落へ辿り着いた。活気あるその集落は、異民であるわたしをすんなりと中へ通してくれた。世界を回る旅人が立ち寄ることも多々あるらしい。国境にあることも相まって、たくさんの人々が出入りするのだと集落　いや、村と言つた方が的確だろう　に住む人が教えてくれた。

少年が小さく笑つて話したように、武具屋の親爺さんは大声で客寄せしている。

『話しかけてくる集落の人々を搔き分け、一番大きなテントの右横にあるテントの前へ立つ。何て言おうか考え込むが、美味しそうなごつた煮スープの匂いに我慢しきれなくなつて、中へと飛び込む』ずつと物を食べていなかつたわたしは、そのテントの扉代わりに使われている幾何学模様の布の隙間より流れてくるスープの匂いに、唾液が溢れてくるのを感じた。

気配を感じ取つたのだろう、中から中年の女性が顔を覗かす。

『帰つたら一番に母さんへ言うんだ』

喉はカラカラに渴いていた。言葉が出ない。少年の顔と声が脳裏で回る。

『ただいまつて』

わたしは少年の母親に深々と頭を下げ、首からぶら下げていた少年からの預かり物である口ケットペンダントを突き出した。

『護りきれなくて、ごめんなさい』

開口一番飛び出したのは、その言葉だつた。

両肩に少しだけ重みが加わる。控え目に顔を上げると、穏やかな微笑を浮かべた少年の母親が小さく首を傾げた。目には涙が滲んでいる。

「ラマンダは、草原の民として……いいえ、草原の戦士として最後まで戦い抜いたでしようか」

「はい……つ」

少年の鮮烈な最後を思い出し、止まつていた涙が零れる。嗚咽が堪えられない。

「あの子は、我々が知り得るどの戦士よりも、勇猛果敢に戦い、命を賭して国を守つてくれました。わたしは、ラマンダの上司として、誇りに……。誇りに……」

言葉が続かない。

誇りに思う、という他人行儀な言葉になど出来るわけがなかつた。護りたかつた。出来ることなら、生きて故郷であるこの地を踏ませてやりたかつた。

いつだつて、國を守るために徵集されたことを愚痴らう、懸命に精進する彼はわたしを励ましてくれていたから。

ラマンダは、反乱軍に圧されてもう後がなくなつたわたしの部隊を救うため、自ら爆薬を纏つて単身、敵陣へ突つ込んだ。白い光が目を刺激したと思ったら、破裂音と共に反乱軍は炎に呑まれた。

苦い記憶はわたしを苛み、それ以来、戦場へ赴くことが出来ない。「あなたみたいな人と巡り逢えて、ラマンダは幸せだつたでしょ。あたしにはわかります。あの子は國を守りたいという気持ちは強かつたけど、命に替えてでも守るのは大切な人だとキチンと理解していた。あたしの自慢の息子は、隊長さんを愛していましたんでしょ？」

「え……？」

思わず眉根を寄せた。ラマンダとわたしが恋仲だとは、一言も喋つていなくて、彼の母親は難なくそれを当てて見せた。

彼女はいまだ私が突き出したままの口ケット・ペンドントを指差す。「それは代々、あたし達の家に伝わる婚礼道具。一緒になろうと決めた相手に渡すんです」

わたしはそれを聞いた途端、力なく地面にへたり込んだ。

女だからと侮られたくない、日々修行を重ねた。男を好きになることさえ自ら戒め、泥水を飲んでようやく隊長職へ就任した。そんな時、ラマンダと出会いてしまい、導かれるように恋に落ちた。

「……わたしは、ラマンダを今でも愛しています」

ラマンダのことだつたら、些細なことさえ確實に記憶している。

銅色の襟足が少し長い髪だとか、草原の色をした吊り上がつた双眸だとか。笑うと左目の方が右目より狭まるところだとか、武器作りが好きなところだとか、照れ屋なところだとか。

彼を命を奪つたのは、実質わたしである。わたしが反乱軍の根城への無謀な強硬突入を計画しなければ、尊い犠牲は出さずに済んだのだ。その計画によつて反乱軍を制圧出来たため、國から栄誉をもらい、民から賛辞を受けても全く心は温かくならなかつた。

ラマンダの定位置であつたわたしの右隣は空いており、わたしの

心にも穴を開けた。

「あなたはラマンダの全身全靈愛した人。世を絶望して、自らを崩壊させないで。多分、このロケットペンドントをあたしに返して死ぬつもりだつたろうけど……それはあたしが許しません」

凛とした声に息を呑んだ。

ラマンダの母親は意思の強い眼差しをこちらへ向けている。

「ラマンダのためにも生きて」

草原に寝転がり、空を仰いだ。凧いだ夜風がわたしの金の髪をさらう。わたしの長いストレートヘアを好きだとラマンダは言つた。胸が軋んだ。

空気が澄んでいるからだらう、星は溢れんばかりに夜空を埋め尽くしている。

『俺が故郷へ帰る時には、サフィアも連れて行く。この人が俺の愛する人だと母親や兄弟にも自慢するんだ』

夜、ベッドの中での内緒話のよう何度もラマンダは話した。反乱軍を平定したらどうしたいか、何をするかを。わたしはそれを想像して心躍らせていた。

「結局、一人で来ることになつちやつたよ」

自嘲する。

ラマンダ　　流星の意を持つた草原の戦士。

彼を失つた絶望さえも愛しさに変えられる日が一刻も早く来るよう、満天の星に願いを捧げた。眦から涙が伝うのと同時に、蒼い流れ星が一筋流れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7098k/>

---

草原の流星

2010年10月8日15時03分発行